

書評

山中仁美著（佐々木雄太監訳、吉留公太ほか訳）
『戦争と戦争のはざままで——E. H. カーと世界大戦』
（ナカニシヤ出版、2017年）

山田 哲也

本書は、享年39歳にして夭折した、同僚であり、友人であった筆者の博士論文の邦訳である。邦訳出版の経緯は省く（本書283頁以下参照）が、本書のタイトルである『戦争と戦争のはざままで——E. H. カーと世界大戦』は筆者の希望であったこと、ただし、博士論文そのもののタイトルは『19世紀リベラル国際主義を超えて——E. H. カーの業績を再考する』とでも訳すべきものであることには注意しておきたい。

E. H. カーは、周知の通り、国際関係、ソ連研究、歴史哲学の分野でそれぞれ業績をあげた人物であるが、その三つの顔を統合することが、本書の最大の目的である。そして筆者が提示する中心的結論は、「カーの多面的な学識や様々な関心事は、19世紀の自由主義的国際主義に対する鋭い批判を中心に展開していたとすることがもっとも適切である」（223頁）という点である。通常、カーに対しては「戦間期ユートピアニズムの理想主義に対する現実主義リアリズム的批判」という評価がなされるが、その起点となったのが19世紀のリベラル国際主義批判だった、というのが、本書の中心的な議論である。

評者は、カー研究としての本書を評価する能力を持ち合わせていないが、評者なりの理解では、カーが戦間期の国際秩序観（あるいは国際秩序構想）において、デイヴィッド・ミトラニー（David Mitrany）の機能主義アプローチに近いものを持っていたこと（179頁）を指摘しているところは、評者の問題関心からみて興味深い点である。というのも、機能主義を含む、「国際機構（国際社会の組織化）を通じた平和」という構想は、通常、理想主義に分類され、カーを始めとする「現実主義」からは批判の対象とされてきた、というのが通説的な理解だからである。ただこのような二分論が正確ではないことは、著者の死の二カ月前に著者の研究室での議論でも話題になった点であり、通説的理解に対して著者が極めて強い疑問と

再検討の必要性を説いていたことを今も思い出すことがある。カーが機能主義に関心を抱いていたことは、その後、評者自身、ロンドン政治経済学院（London School of Economics and Political Science）に所蔵されているミトラニーのアーカイブスの中から、当時、『タイムズ』紙の論説委員であったカーからミトラニーに宛てられた書簡で、ミトラニーに対し彼の*The Working Peace System*（1943）の要約を同紙に掲載しないかと打診していたことを確認できたことから明らかなのであるが、そのような成果があったことも著者から教示を受けたことであった。

今となっては聞く術もないのだが、著者は「カー研究者」であろうとしたのか、それとも「戦間期国際政治思想史研究者」であろうとしたのか。私はかねてから、後者である、と見立てていた。本書は、カーの思想を、カー自身の著作はもちろん、同時代の思想家や他のカー研究者の著作を通じて丹念に読み解く作業に集中しており、そしてその作業に成功しているだろうと思われる。その一方、著者は終章において、現在の国際関係研究の潮流にも触れた上で、「カーの思想の理解は、より緻密で歴史に敏感な方法で現代世界を理解することに寄与するだろう」（233頁）という一文で本書を締めくくっている。恐らくは、19世紀（リベラル）国際主義が戦間期国際秩序観にどのような影響を与えたか、そしてさらにそれが第二次世界大戦後の国際関係を巡る言説に影響を与えているか、といったことが著者の視野にあったのではないか。『戦争と戦争のはざままで』というタイトルは、様々な意味で示唆的であるのだが、「戦間期」というはざまを手がかりに、さらなる広がりや著者自身も希望していたことは確かである。

改めてご冥福を祈るとともに、著者が示そうとして叶わなかった知的世界に思いを致しながら、残された者の一人として、著者の眼に叶う研究をしなければならないと思う次第である。